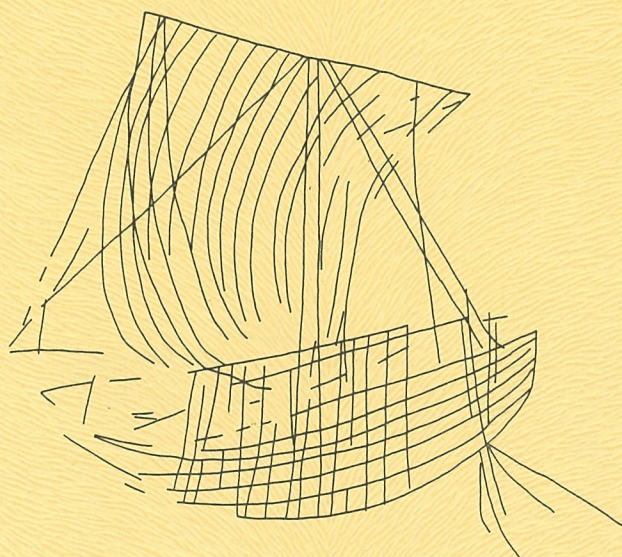


宇土半島基部遺跡群 I

タビラ カミノヤマ
田平遺跡・上山遺跡

宇土市埋蔵文化財調査報告書第17集



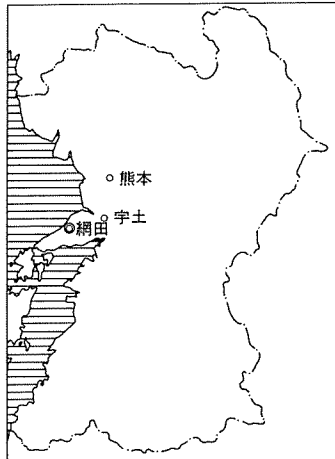
1988

熊本県宇土市教育委員会

宇土半島基部遺跡群 I

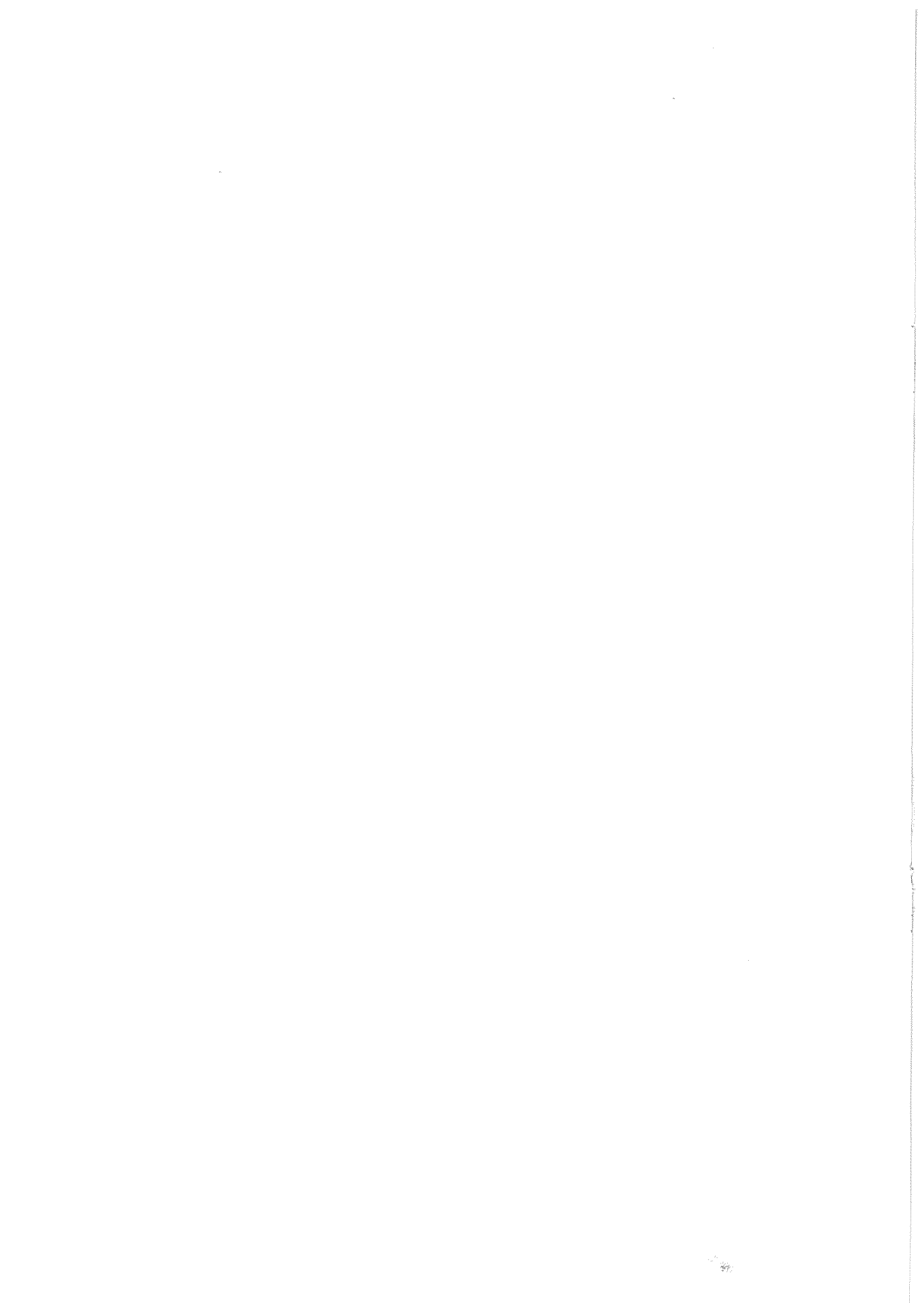
タビラ カミノヤマ
田平遺跡・上山遺跡

宇土市埋蔵文化財調査報告書第17集



1988

熊本県宇土市教育委員会



序

宇土市は今年10月で市制施行30周年を迎えます。昭和33年、網田村と宇土町の合併により宇土市が誕生いたしました。

網田は、古くから色々な事象が展開され、それらの歴史的遺産も数多く残っています。今回は、田平遺跡と上山遺跡の調査を国・県の補助を受け実施しました。

上山遺跡の船の線刻は、写実的に描かれており、往古の人々が海原を航行する姿を想像させてくれます。

なお、調査において指導・協力を賜りました各位に対し、厚くお礼申し上げます次第です。

昭和63年 3月

宇土市教育委員会

教育長 白石 喜久雄

例 言

1. 本書は、宇土半島基部遺跡詳細分布調査事業に伴う田平遺跡^{タビラ}第4次及び上山遺跡^{カミノヤマ}の調査報告書である。
2. 調査に当たっては、昭和62年度の国庫補助、県費補助を受け実施した。
3. 調査は、宇土市教育委員会が調査主体で実施し、出土遺物、その他の関係資料の保管も行っている。
4. 表紙は、上山遺跡の船の線刻。
5. 本書収録の第14図から第19図は『熊本県装飾古墳総合調査報告書』より転載した。
6. 遺構・遺物の実測は木下洋介・元松茂樹・青木勝士が、製図は主に今村友香が行い、執筆・編集には木下・元松が当たった。

本文目次

第1章 序 章	1
1. 1 はじめに	1
1. 2 田平遺跡調査組織	1
1. 3 上山遺跡調査組織	2
第2章 立地と環境	3
2. 1 網田平野	3
2. 2 田平遺跡の立地	6
2. 3 上山遺跡の立地	8
第3章 田平遺跡の調査	9
3. 1 遺 構	9
3. 2 遺 物	9
3. 3 小 結	13
第4章 上山遺跡の調査	14
4. 1 船の線刻	14
4. 2 小 結	19
第5章 最後 に	30

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡位置図 (1/25,000) …	4	第12図	宇土市周辺装飾古墳位置図 (1/50,000) ……………	22
第2図	田平遺跡地形図 (1/10,000) …	6	第13図	ヤンボシ塚古墳装飾文実測図 (1/4) ……………	23
第3図	田平遺跡出土遺物・遺構実測図 …	7	第14図	梅崎古墳装飾文実測図 (1/10) …	24
第4図	上山遺跡地形図 (1/10,000) …	8	第15図	飯又古墳装飾文実測図 (1/10) …	25
第5図	田平遺跡トレンチ配置図 (1/3,000) ……………	10	第16図	古城古墳参考地装飾文実測図 (1/6) ……………	26
第6図	遺構配置図 (1/100) ……………	11	第17図	桂原古墳装飾文実測図 (1/4) …	27
第7図	出土遺物 (土器) 実測図 (1/3) ……………	12	第18図	桂原2号墳装飾文実測図 (1/4) ……………	28
第8図	出土遺物 (石器) 実測図 (1/3) ……………	13	第19図	不知火塚原1号墳装飾文実測図 (1/4) ……………	29
第9図	上山遺跡石材実測図 (1/10) …	15			
第10図	上山遺跡線刻船実測図 (1/3) …	16			
第11図	上山遺跡線刻船拓影 (1/2) …	17			

図 版 目 次

図版1	網田平野空中写真 ……………	33	図版13	上山遺跡近景 ……………	39
図版2	田平遺跡遠景 ……………	34	図版14	上山遺跡より北を望む ……………	40
図版3	第4次調査地全景 ……………	34	図版15	上山遺跡より南を望む ……………	40
図版4	調査地北側 ……………	35	図版16	線刻のある石材 ……………	41
図版5	調査地南側 ……………	35	図版17	線刻船 (全体) 1 ……………	41
図版6	1号土壙周辺 ……………	36	図版18	線刻船 (全体) 2 ……………	42
図版7	1号土壙 ……………	36	図版19	線刻船 (マスト部分) ……………	42
図版8	遺物出土状態 (土師器高杯) ……	37	図版20	線刻船 (船首部分) ……………	43
図版9	遺物出土状態 (土師器皿) ……	37	図版21	線刻船 (中央部分) ……………	43
図版10	遺物出土状態 (石器) ……………	37	図版22	線刻船 (船尾) ……………	44
図版11	出土遺物 ……………	38	図版23	線刻船 (中央部分) ……………	44
図版12	上山遺跡遠景 ……………	39			

第1章 序 章

1. 1 はじめに

熊本県宇土市の西部に位置する網田平野は、条里制が施されており『肥後郡浦庄応永11年地検帳』には坪付地名がみられる。昭和55年から圃場整備事業に伴い田平遺跡の発掘調査を実施しており、今回の調査は第4次の調査となる。第1次調査では旧石器、2次調査では平安時代の土壌墓が出土している。今回の調査は昭和62年5月26日から6月6日まで行った。

また、平野の北側の山稜に位置する上山遺跡から、船の線刻がある石材が発見された。発見者の村崎ミスエさんからは、昭和63年1月22日に連絡があった。1月25日と28日に現地調査を行う。30日には肥後考古学会々長の三島格先生から現地指導を受ける。2月14日石材を市立図書館に移転し、展示を行う。

田平遺跡・上山遺跡共に宇土市文化財保護審議委員の村田房夫先生の指導を受け、調査を行った。

1. 2 田平遺跡調査組織

調査主体	宇土市教育委員会 教育長 船田 至 (前任) 白石喜久雄 (後任)
調査総務	社会教育課長 本郷裕幸 (前任) 白石喜久雄 (後任、教育長兼務) 文化振興係長 一 宗雄
調査庶務	参事 中野照子
調査担当	主事 木下洋介 主事 岩本龍昌
調査補助	川口 泉・渡辺辰男・川口タツエ・山下ミサエ・前田フサ子・中島マツヨ・船田キヨ子・田中啓三・山田英裕
遺物整理	元松茂樹・今村友香・青木勝士
調査指導	村田房夫

1. 3 上山遺跡調査組織

調査主体	宇土市教育委員会 教育長 船田 至 (前任) 白石喜久雄 (後任)
調査総務	社会教育課長 本郷裕幸 (前任) 白石喜久雄 (後任、教育長兼務) 文化振興係長 一 宗雄
調査庶務	参事 中野照子
調査担当	主事 木下洋介
調査補助	元松茂樹
調査協力	山本義孝・村崎ミスエ
調査指導	三島 格 (肥後考古学会会長) 村田房夫 (宇土市文化財保護審議委員) 平山修一 (日本考古学協会員) 高木恭二 (日本考古学協会員)

第2章 立地と環境

2. 1 網田平野

熊本県のほぼ中央部から、有明海と不知火海を分断するかたちで西に突出した宇土半島は、主峰大岳（標高478m）を中心とする山塊より放射状に派生した丘陵と、その間を流れる幾筋もの小河川沿いに形成された小平野によって成っている。しかし、地域によっては地形的に大きな違いがあり、不知火海に面する南岸地域と有明海に面する北岸地域に大別することができる。南岸地域には、傾斜の比較的緩やかな舌状丘陵が多いため、小規模ながらも多くの平野部が形成され、入江の多い海岸線をなしているのに対し、北岸地域は、急な傾斜の丘陵が海岸線まで迫っているため、平野には恵まれず、海岸線も比較的単調である。

網田平野は、半島北岸のほぼ中間に位置する半島最大の平野であり、東西1.3km、南北1.2kmを占める。平野は、東から西へ流れる網田川の作用により形成された扇状地である。また、平野の周囲は山陵で囲まれ、盆地状をなす。

網田平野では、旧石器時代から近世に至るまでの遺物や遺構が確認されている。なかでも旧石器の出土は、宇土半島で唯一の貴重な資料となっている。

古墳時代、網田平野周辺の丘陵上には城1号・城2号・ヤンボシ塚古墳等を始めとした古墳が次々に造られている。これらの古墳の特徴は、主体部に箱式石棺・小型の石棺系石室・横穴式石室等を持ち、大きいものでも墳丘の直径が20m前後の小円墳であり、いずれも有明海ないし網田平野を見下ろせる見晴らしの良い丘陵上に造られていることである。このことは、半島南岸地域の古墳についても同じように言える。しかし、半島基部に於いてはスリバチ山古墳（全長約100m）・向野田古墳（全長約86m）・天神山古墳（全長約110m）等に代表される10数基の前方後円墳が築造され、墳丘や主体部の規模、副葬品の豪華さ等のあらゆる面で半島部の古墳を圧倒しており、両者の間に明らかな権力の違いが認められる。

平安時代後期には、宇土半島西部は阿蘇家の勢力圏内に組入れられ、その阿蘇家の寄進によって皇室領となり郡浦荘が成立した。当然、網田もそのなかに含まれていたが、天文19年(1550)阿蘇家が名和家に郡浦・網田を譲渡したことで、郡浦荘は完全に消滅した。

江戸時代になって手永制度が敷かれると、宇土郡には松山手永と郡浦手永が置かれた。網田を含む半島西部は郡浦手永に組入れられている。

現在、田平遺跡の位置する網田平野は、行政区画としては宇土市に属している。しかし、その歴史を考える上では、現在の宇土市中心部（旧宇土町）とのつながりよりも、三角町や不知火町西部（旧松合町）といった宇土半島西部地域とのつながりが深く、宇土半島部（半島基部



第1図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

- | | | | |
|------------|-----------|-------------|----------|
| 1. 田平遺跡 | 6. マブシ古墳群 | 11. 網田神社 | 16. 浦新地 |
| 2. 上山遺跡 | 7. 小松古墳 | 12. 田平城跡 | 17. 網田新地 |
| 3. 城2号墳 | 8. 小松2号墳 | 13. 戸口の六地藏 | |
| 4. 城1号墳 | 9. 上床遺跡 | 14. 引ノ花の六地藏 | |
| 5. ヤンボシ塚古墳 | 10. 長福寺跡 | 15. 網田焼窯跡 | |

を除く)の一部として捉えなければならないようである。

条里について

古代、網田平野には条里制が敷かれている。このことが、田平遺跡発掘調査の当初の原因であった。しかし、これまでの調査に於いては、その痕跡を明らかにすることは出来ていない。

網田平野に条里制が敷かれたことを証明するものとして「肥後郡浦御庄応永十一年地検帳」という古文書が阿蘇文書の中にある。これは、宇土半島の西半分を占める郡浦庄の田(約230町)について、一筆毎の所在地を古代に設定された条里制の里名と坪名によって表示し、一段(反)当たりの斗代(年貢)や、現在(当時)の作付け面積等を一筆毎に記入した検知帳である。時代的には室町時代初期にあたる応永11年(1404)のものではあるが、「網田二十五坪 二丈……」「郡浦一坪 五段……」等という記載があり、条里の制定から数百年も経たこの頃まで、その呼称が残っていたことになる。網田平野に於いては、網田り(里)の中に三十三坪を除く一から三十六坪までがあるが、現存する坪付地名はない。しかし、坪付地名以外で現在も残っている地名として当時の網田村関係分を抜粋すると、次の地名が挙げられる。

網田・笠末・引ノ鼻・柳原・河原田・カリキ・ヒヤケ・カコウ崎・早原・宮ノ後・栗林・寺床・早馬木・千飯河・田平・小松浦・津留・宮前・木藤三・ウワハル

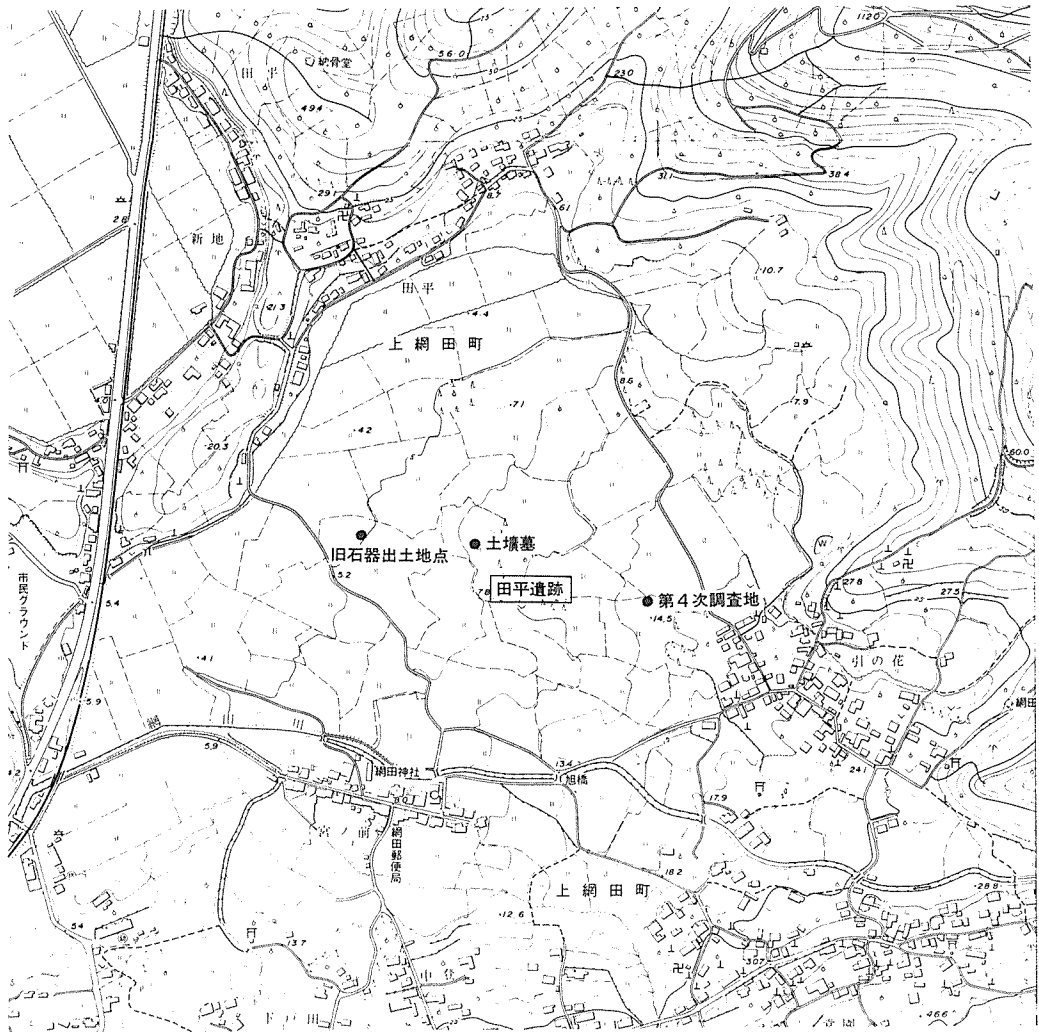
この他に寺社関係では網田宮・戸口宮・長福寺等が挙げられており、現在も宮ノ前に鎮座している網田神社等の創建の古さを示している。

宇土半島に制定された条里については、地形的に考えて平地が少ないために飛地割定している可能性が強い。また、全ての坪の広さが一町(360歩)であったかも疑問であり、今後の詳しい調査が待たれる。

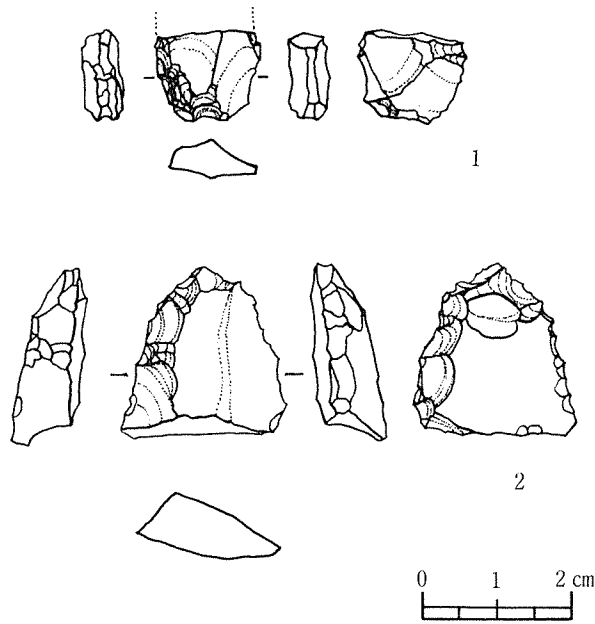
2. 2 田平遺跡の立地

田平遺跡は網田平野の中央部に位置する。網田川の中流域から北西へ延びた標高4mから10mの微高地が遺跡の範囲と考えられる。

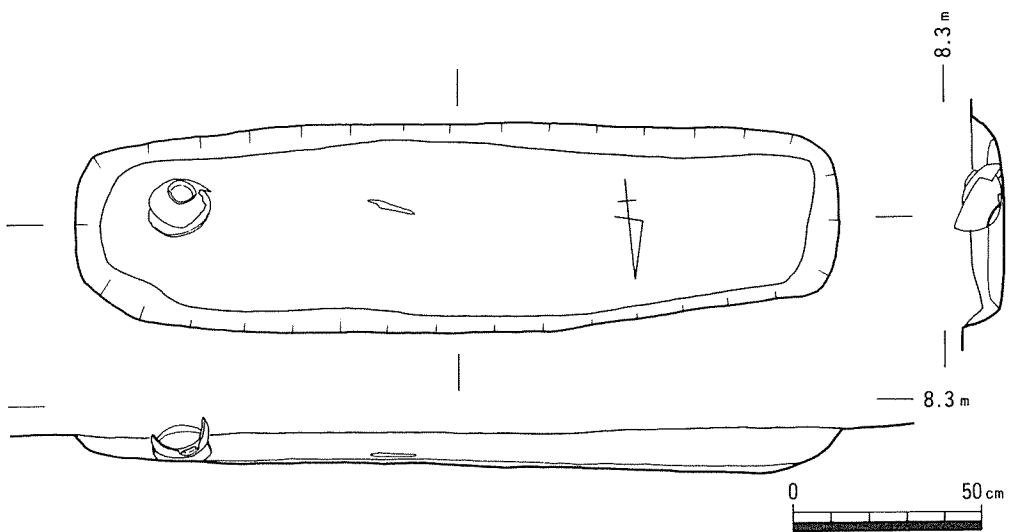
田平遺跡は、これまで3度の調査を行っている。昭和55年の第1次調査では、宇土半島で初めての旧石器が出土した。第2次調査（昭和60年）では、平安時代の土壌墓を、翌年の第3次調査では、土壌を確認している。また、これらの調査で出土した遺物には、旧石器、石鏃、石斧等の石器類、縄文土器、弥生式土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、網田焼、刀子などがある。



第2図 田平遺跡地形図 (1/10,000)



第1次調査出土旧石器 (1/1)



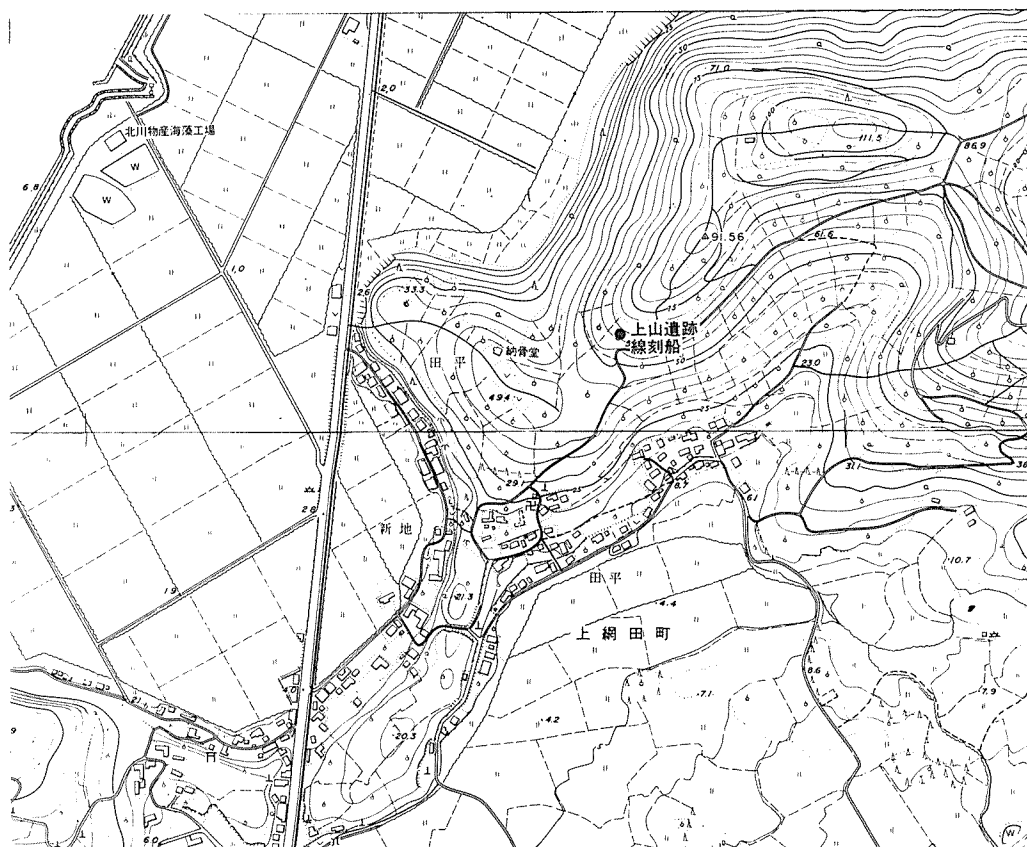
第2次調査出土1号土墳墓 (1/20)

第3図 田平遺跡出土遺物・遺構実測図

2. 3 上山遺跡の立地

上山遺跡は、網田平野の北側の山稜に位置する。この山稜は標高91mのトンボシサンから南西へ派生しシマノヤマに至る。その間に田平城跡、城2号墳、城1号墳、マブシ古墳群などの遺跡が分布している。また、南側の丘陵には、ヤンボシ塚古墳がある。本遺跡は、トンボシサンの頂上からのやや急な斜面の下方標高56mの地点に位置する。周辺は、段々畑になっており、船の線刻のある石材は、畑の石垣の中から発見された。また、ここからの眺望はよく、北には有明海があり、遠く島原半島を見ることができ、南には網田平野から背後の大岳が一望できる。

上山遺跡は、線刻石材と箱式石棺からなる。線刻石材の東側約10mの地点から、十数年前に石棺と刀子2本が出土したという。さらにその北東側約40mの蜜柑畑には半壊の箱式石棺がある。現在、この一帯は蜜柑園の段々畑となっているが、そのなかには、古墳と疑わしいところが数ヶ所あり、開墾時に石棺が出たとの話も多く、古墳時代に於いては、他の古墳群と同じく網田平野を囲む墓域のひとつになっていたようである。



第4図 上山遺跡地形図 (1/10,000)

第3章 田平遺跡の調査

3.1 遺構

調査区は、引ノ花の集落から西へ延びる微高地の尾根に位置し、標高14mを測る。この尾根の先端部に第2次調査で検出した縄文時代の土壇と平安時代の土壇墓がある。

調査区の層序は上から水田の耕作土、床土、黒色土(包含層)、褐色粘質土、礫層となっている。遺構の中には包含層から掘り込んでいるものもあるが、遺構の確認を褐色粘質土の上面で行ったため、時期の違いが明確にできなかった。

1号土壇 調査区の北西部に位置し、長さ265cm、幅208cm、深さ約35cmを測る。土壇内からは鉄滓、縄文土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、青磁が出土。

Pit群 調査区のほぼ全域にPitを検出したが、建物跡などの規則性のあるPitは確認されなかった。

3.2 遺物

土器

Pit出土

8は、P1出土の土師質土器の皿である。轆轤成形され、外底部には回転糸切痕を残す。体部の広がり直線的で、端部は丸くおさめ、口唇部の一ヶ所を打ち欠く。色調は浅黄橙色を呈する。10は、P40出土の土師質土器の皿である。轆轤成形され、体部は内湾し、底部にはみ出した土は削り取っている。色調は浅黄橙色を呈する。

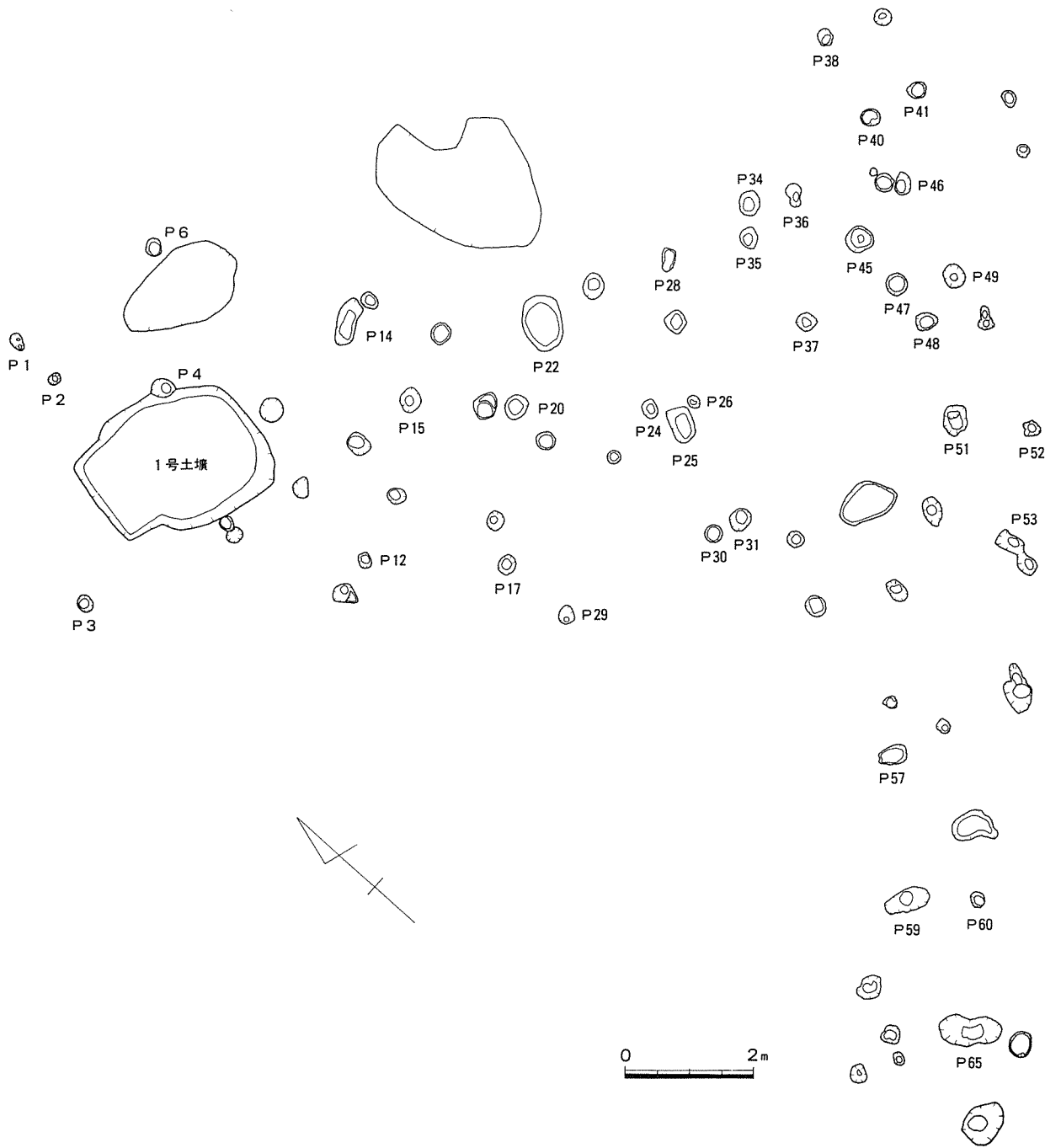
包含層出土

1～3は縄文土器。1は鉢形土器の口縁部で、外面は横方向のナデ調整後、沈線を施す。内外面共ににぶい燈色で、胎土には雲母を含む。焼成は良好である。2は、鉢形土器の底部、平底である。外面はにぶい燈色で、内面は灰褐色である。胎土には白色砂粒を含み、焼成は良好である。3は、鉢形土器の底部、平底である。外面はにぶい燈色で、胎土には白色砂粒を含む。焼成は良好である。

4～7は土師器。4は、壺形土器の口縁部片。口縁部は、直線的に立ち上がり、端部は外方へ曲げ、外面はナデ、内面は斜め方向のハケ目、色調は浅黄燈色を呈する。焼成は良好である。5は、複合口縁の壺形土器の口縁部片。外面はナデ、内面は斜め方向のハケ目、色調は浅黄燈



第5図 田平遺跡トレンチ配置図 (1/3,000)



第6図 遺構配置図 (1/100)

色を呈する。焼成は良好である。6は、壺形土器の頸部片。外面は斜め方向のハケ目、色調は浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。7は、高杯の脚部。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り、色調は燈色を呈する。焼成は良好である。

9は、土師質土器の皿である。体部は内湾、口縁部は外反し、端部は丸くおさめ、口唇部の一部に二次的に火を受けている。色調は黄橙色を呈する。

石 器

Pit出土

2は、P45から出土の打製石斧、基部を欠く。両面とも自然面を残し、周囲に打撃を加える。石材は砂岩

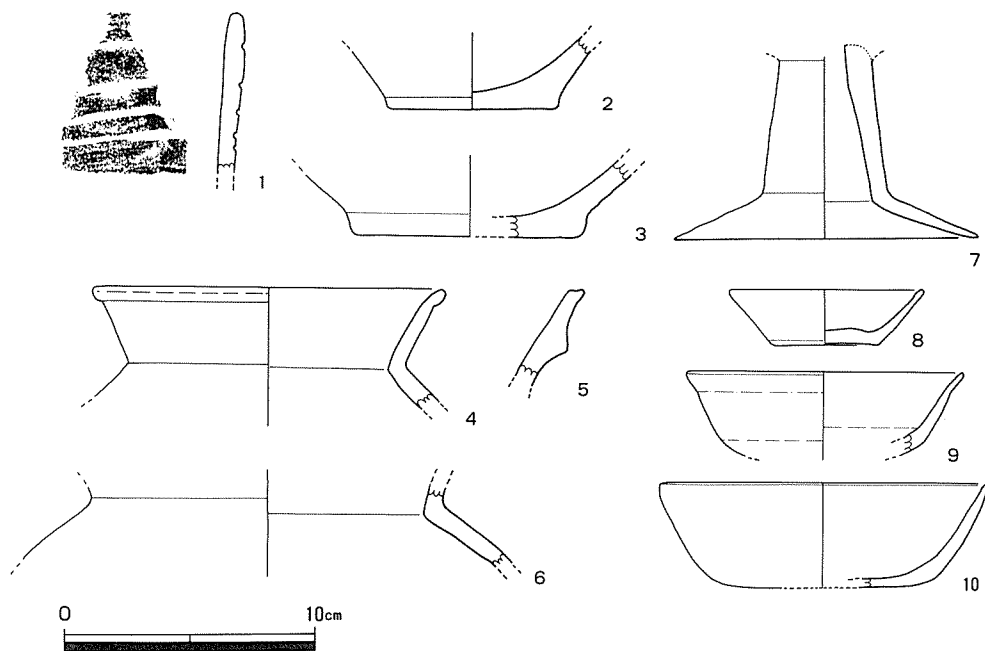
遺構面出土

1は、磨製石斧で縦方向に剝離している。片面に敲打痕を残し、欠損後再加工のため両側辺部に再度打撃が加えられている。石材は安山岩。

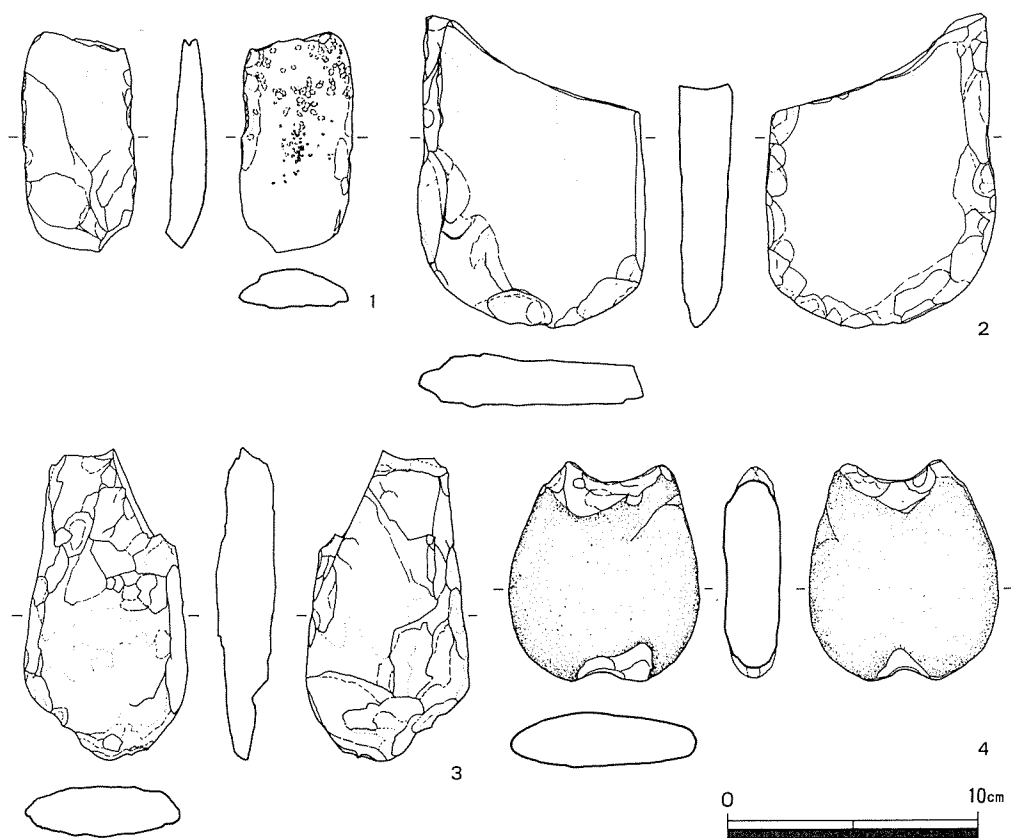
周辺採集

3は、扁平な打製石斧、刃部の片面を欠く。全体に摩滅が著しい。石材は頁岩。

4は、両端を打ち欠きでつくる石錘。重量214gを測る。石材は安山岩。



第7図 出土遺物（土器）実測図（1/3）



第8図 出土遺物（石器）実測図（1/3）

3. 3 小 結

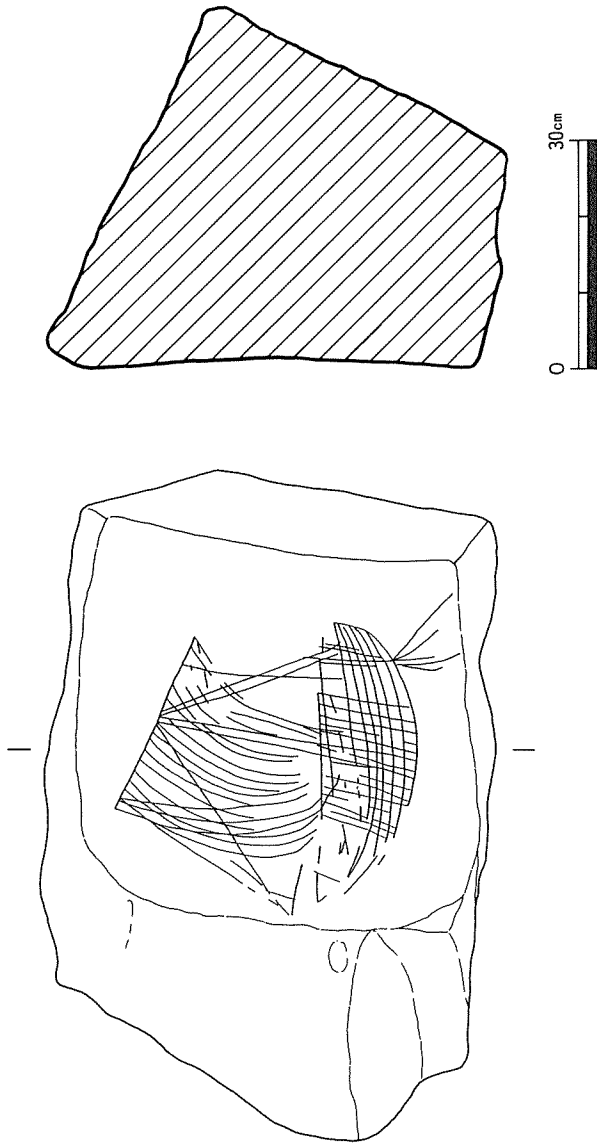
田平遺跡第4次調査では、1号土壌から鉄滓が出土、製鉄関係の遺構かとも思えるが明らかでない。遺物は、覆土中より龍泉窯系の青磁が出土したが年代の決め手にはなり得ない。調査区のほぼ全域にPitを検出したが、建物跡などの規則性のあるPitは確認されなかった。また、調査区の北西側で厚く堆積する包含層は縄文から中世までの遺物を含んでいる二次堆積層である。

第4章 上山遺跡の調査

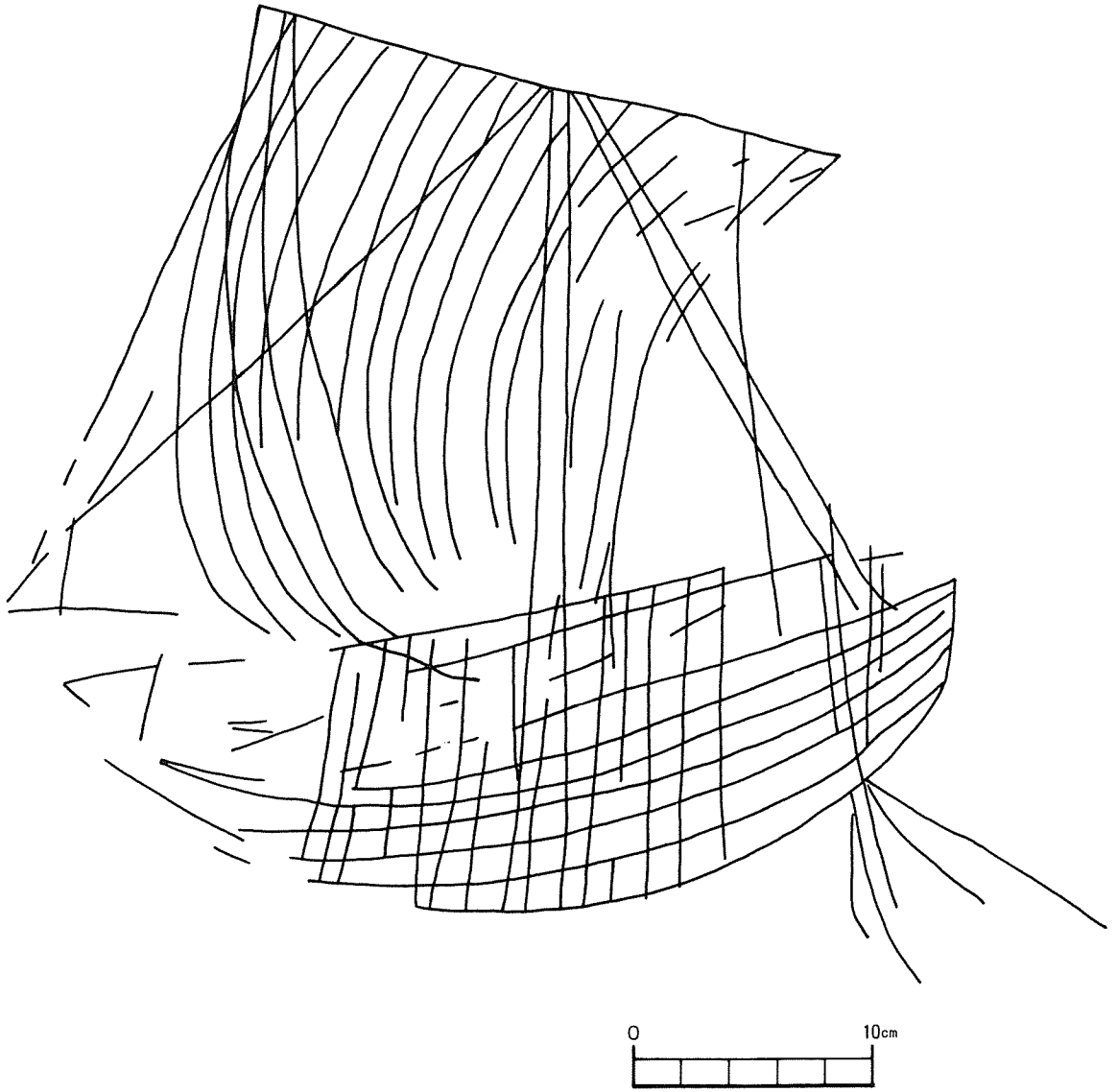
4.1 船の線刻

線刻のある石材は、安山岩で、幅89cm、高さ57cm、奥行き40cmを測る。石材には線刻以外の加工痕はない。線刻の描かれている面は縦49cm、横51cmの正方形で、中央部がわずかにくぼんでいる。表面には土質が残り、線刻はこの土質の部分に描かれている。

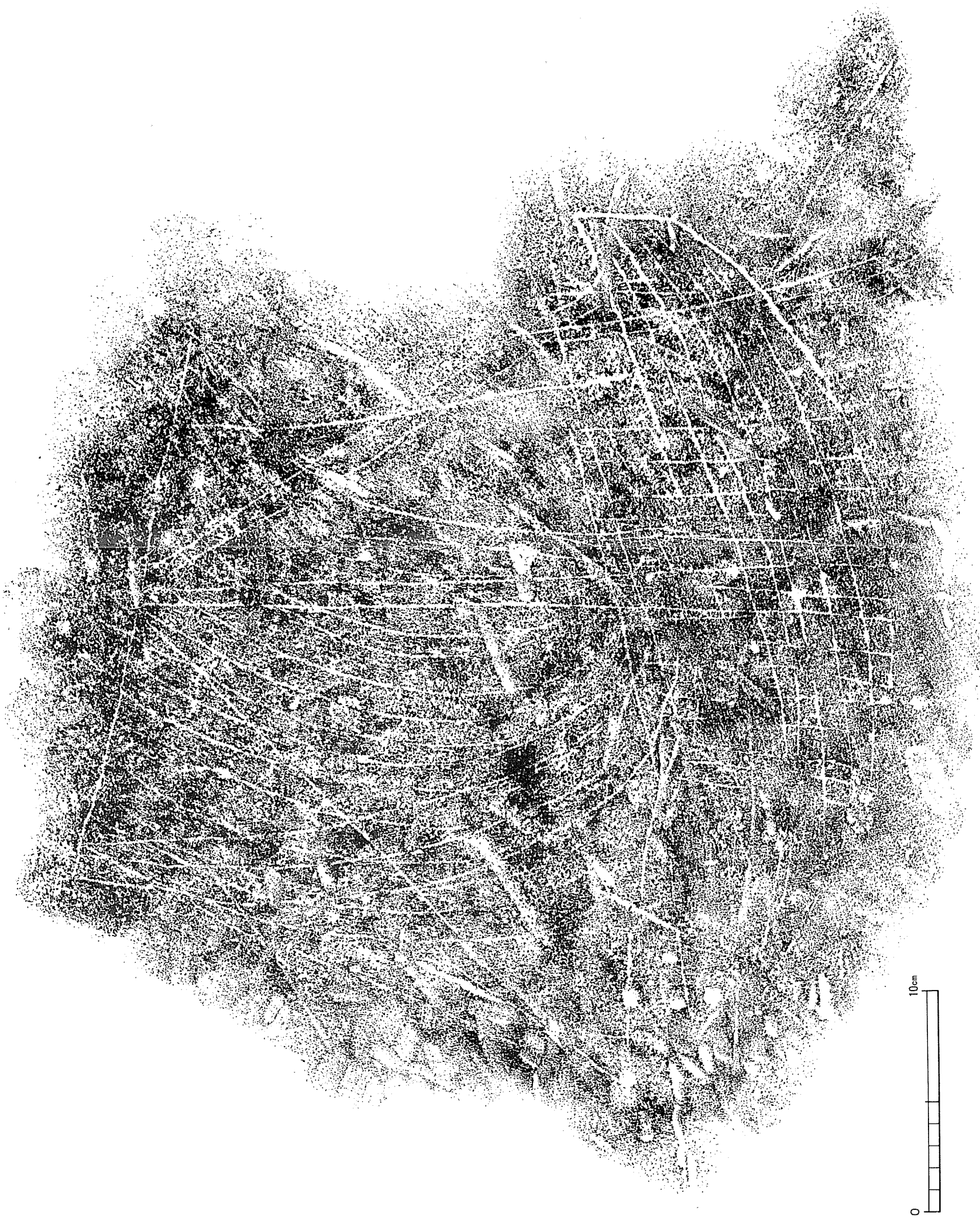
線刻は、幅約1～2mmの沈線で船首から船尾まで約40cm・船体の高さ約9cm（最大）・船底から帆の上端まで約38cm・マストの高さ約32cm・帆の上端の幅約24cmの帆船を描く。船体は、船首部分が不明確ではあるが外輪は三日月状を呈し、その中にやや細い弓状の横線を5本描く。船尾近くには舵（操舵權）と思われる縦線数本がやや右下がりに海中に突出す。マストは、船体の中央よりやや船尾側寄っており、船底から2本の線でほぼ垂直に描かれており、高さ約32cm・下端幅2.3cm・上端幅0.7cmを測り、船首から引かれた1本の線と船尾から引かれた2本の線によって支えられている。帆は、20本余りの弓状の縦線によって表現されており、後方からの強い風を受けてはらむ姿が写實的に描かれている。帆の上部には、僅かに弓状になった綱のようなものが両端近くから船首と船尾方向に1本ずつ延びている。帆を固定もしくは帆の向きを調整する綱であろう。帆の下端は、船体の上部近くで引き絞られているようにも見えるが、両端以外線は途中で切れているので、はっきりとはしない。また、船体の中央にはやや弱い14本の縦線が描かれているが、全て船底で切れている。



第9图 上山遺跡石材実測图 (1/10)



第10図 上山遺跡線刻船実測図（1/3）



第11図 上山遺跡線刻船拓影 (1/2)

4. 2 小 結

上山遺跡の船と、他の遺跡の船との比較を試みたい。その対象として船の線刻が多くみられる装飾古墳が造られた古墳時代の船に主眼を置く。

まず、船体に描かれている横線は、宇土郡不知火町の桂原古墳の船などにも見られ、宮崎県西都原110号墳から出土した船の埴輪や、福岡市樋渡遺跡から出土した木で造られた船の模型などの例もあり、この頃にすでに準構造船あるいは構造船があったことは確実で、舷側に用いられた木材（板）の継ぎ目の表現であると思われる。また、舵の表現されている古墳は幾つかあるが、そのなかでは鳥取県鷺山古墳のものに最も近い。ただ、鷺山古墳が2本の線で表現しているのに対し、これには5本以上の線があり、舵が切った波なども一緒に表現している可能性がある。最も問題があるのは帆の形態である。古代の船は帆に網代や蓆を用い、それも固定式で追風の時だけに利用して、向い風や横風の時は取外し櫂だけで走っていたと考えられている。桂原古墳の船は、帆に3本の縦線が入っているので蓆帆であろうとされているのでこの船も蓆帆と考えられない事もない。しかし、縦線の数之余りにも違い過ぎて、蓆帆としてよいのか判らない。帆の下端や帆を引く綱の形態も、古墳時代の船としては今のところ類例がない。古代の船の帆は、固定式で長方形であったと考えるのが一般的であるが、この船の帆は、見方によっては下端を一ヶ所に絞り、しかも可動式であると思えないこともない。しかし、これはあくまでも素人目に見た感想に過ぎず、この船の詳しい構造については専門の鑑定をまちたい。

参考文献

- 野田久雄・亀井照人他『鳥取県装飾古墳分布調査概報』鳥取県教育委員会、1981。
- 柴田恵司「古代の船と航海術」『松浦堂研究7号』松浦堂研究連合会、芸文堂、1984。
- 渡辺誠「網代帆・隼人とその周辺」『西と東と——前嶋信次先生追悼論文集』汲古書院、1985。
- 石井讓治「海上の道」『邪馬台国への道』朝日新聞西部本社、1980。
- 高木正文他『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会、1984。
- 倉原讓治「全国装飾古墳明細一覧」『熊本の装飾古墳』山鹿市立博物館、1987。
- 三島格他『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、宇土市教育委員会、1981。
- 平山修一『仮又古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集、宇土市教育委員会、1982。
- 高木恭二・木下洋介『ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集、宇土市教育委員会、1986。
- 高木恭二・木下洋介『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集、宇土市教育委員会、1987。

船の装飾をもつ古墳一覧表

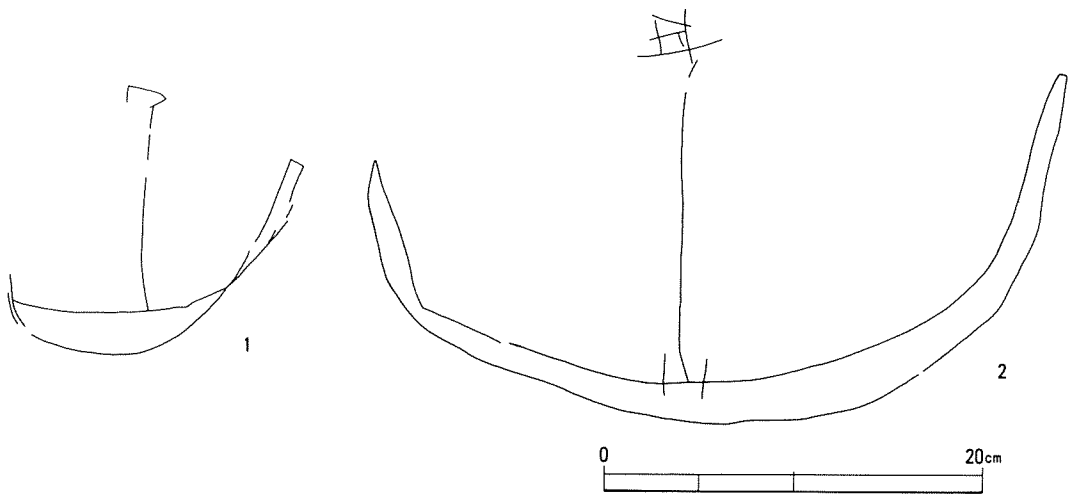
No.	古墳名	所在地	古墳の形態・特徴	装飾の方法・特徴
1	船玉古墳	茨城県真壁郡関城町船玉	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
2	鹿島横穴群第8号	千葉県君津郡大佐和町西和田	横穴墓	線刻
3	岩坂横穴	富津市岩坂	横穴墓	線刻
4	洗馬谷横穴群第2号	神奈川県鎌倉市打越馬谷	横穴墓	線刻
5	堂後下横穴群第9号	中郡大磯町国府本郷	横穴墓	線刻
6	美歎41号墳	鳥取県岩美郡国府町美歎	円墳・横穴式石室	線刻
7	美歎43号墳	々	前方後円墳・横穴式石室	線刻
8	宮下22号墳	々 宮下	円墳・横穴式石室	線刻
9	鷺山古墳	々 町屋	円墳・横穴式石室	線刻
10	栃本4号墳	々 栃本	不明・横穴式石室	線刻
11	空山15号墳	鳥取市久末	円墳・横穴式石室	線刻
12	空山16号墳	々	円墳・横穴式石室	線刻
13	阿古山22号墳	気高郡青谷町青谷	不明・横穴式石室	線刻
14	吉川43号墳	々 吉川	不明・横穴式石室	線刻
15	西穂波9号墳	東伯郡大栄町六尾	不明・横穴式石室	線刻
16	西穂波27号墳	々	円墳・横穴式石室	線刻
17	剣塚古墳	福岡県福岡市竹下那珂町	前方後円墳	線刻
18	羅漢山横穴	中間市垣生	横穴墓	線刻
19	瀬戸横穴	々	横穴墓	色彩(赤)
20	土居の内横穴	々	横穴墓	線刻
21	竹原古墳	鞍手郡若宮町竹原	円墳・横穴式石室	色彩(赤・黒)
22	観音塚古墳	朝倉郡夜須町砥上	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
23	原古墳	浮羽郡吉井町富永	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
24	鳥船塚古墳	々	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
25	珍塚古墳	々	横穴式石室	色彩(赤・青)
26	五郎山古墳	筑紫野市原田	円墳・横穴式石室	色彩(赤・黒・緑)
27	下馬場古墳	久留米市草野町吉木	円墳・横穴式石室	色彩(青)
28	黒部6号墳	豊前市松江	円墳・横穴式石室	線刻
29	大原9号石棺	熊本県玉名郡岱明町野口	箱式石棺	線刻
30	石貫穴観音横穴群第2号	玉名市石貫	横穴墓	浮彫・色彩(赤)
31	石貫穴観音横穴群第3号	々	横穴墓	浮彫・色彩(赤)

No.	古墳名	所在地	古墳の形態・特徴	装飾の方法・特徴
32	石貫ナギノ横穴群第12号	玉名市石貫	横穴墓	線刻
33	石貫ナギノ横穴群第30号	々	横穴墓	線刻
34	石貫古城横穴群II-13号	々	横穴墓	線刻
35	原横穴群第10号	々 富尾原	横穴墓	浮彫
36	永安寺東古墳	々 永安寺	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
37	城迫間横穴群第2号	々 溝ノ上	横穴墓	線刻
38	小原大塚横穴群第13号	山鹿市小原	横穴墓	浮彫
39	小原大塚横穴群第39号	々	横穴墓	浮彫・色彩(赤)
40	小原大塚横穴群第41号	々	横穴墓	浮彫・色彩(赤)
41	小原大塚横穴群第75号	々	横穴墓	浮彫
42	長岩横穴群第46号	々 志々岐	横穴墓	浮彫
43	長岩横穴群第108号	々	横穴墓	浮彫
44	弁慶ガ穴古墳	々 熊入	円墳・横穴式石室	色彩(赤)
45	岩原横穴群IV-3号	鹿本郡鹿央町岩原	横穴墓	浮彫・色彩(赤)
46	桜ノ上横穴群I-6号	々	横穴墓	色彩(白)
47	千金甲3(乙)号古墳	熊本市小島下町高城山	円墳・横穴式石室	線刻・色彩?
48	古城古墳参考地	宇土市古城町	横穴式石室?	線刻
49	梅崎古墳	々 笹原町梅崎	不明・横穴式石室	線刻
50	仮又古墳	々 恵塚町仮又	円墳・横穴式石室	線刻
51	ヤンボシ塚古墳	々 上網町小宗	円墳・横穴式石室	線刻
52	不知火塚原1号墳	宇土郡不知火町塚原	円墳・横穴式石室	線刻
53	桂原古墳	々 長崎	円墳・横穴式石室	線刻
54	桂原2号墳	々 長崎	円墳・横穴式石室	線刻
55	穴観音古墳	大分県日田市内河町倉園	円墳・横穴式石室	色彩(赤・緑)
56	ガランドヤ1号墳	日田市石井町西園	円墳・横穴式石室	色彩(赤・緑)
57	伊美鬼塚古墳	東国東郡国見町伊美	円墳・横穴式石室	線刻
58	天山横穴墓	佐賀県多久市東多久町納所	横穴墓	線刻
59	勇猛寺古墳	杵島郡北方町芦原	円墳・横穴式石室	線刻
60	長戸鬼塚古墳	長崎県北高来郡小長井町	円墳・横穴式石室	線刻
61	鬼屋久保古墳	壱岐郡郷ノ浦町	円墳・横穴式石室	線刻
62	百田頭5号墳	々 芦部町国分	円墳・横穴式石室	線刻
63	双六古墳	々 勝本町立石	前方後円墳・横穴式石室	線刻

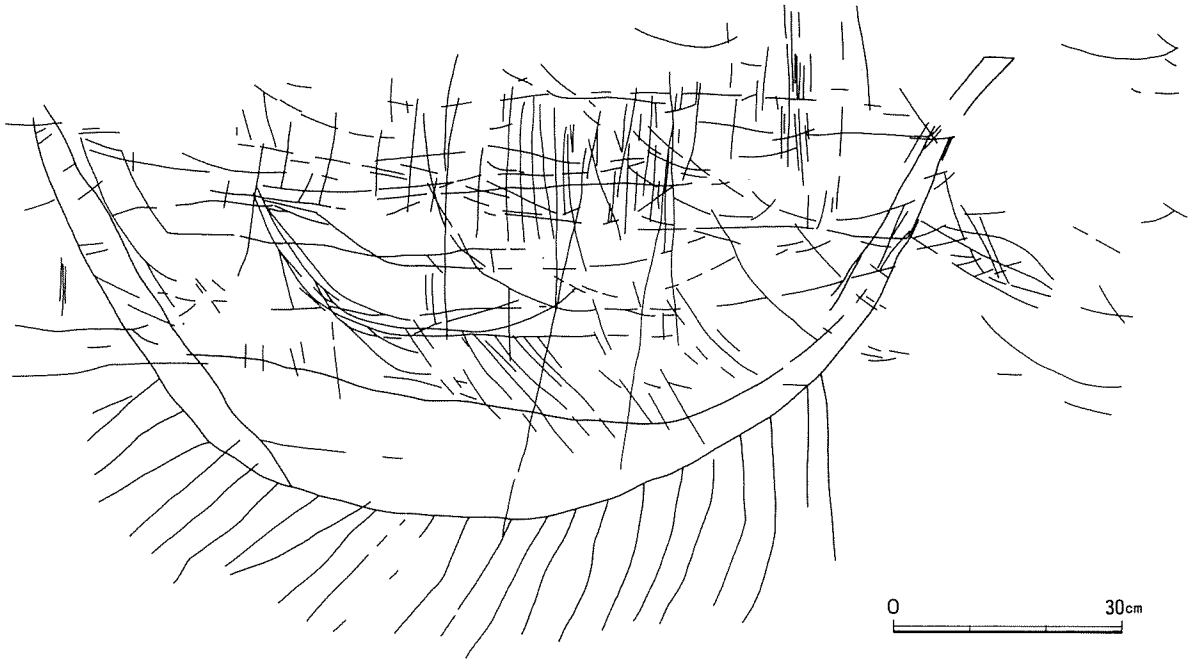


- (●は舟の線刻をもつ古墳)
1. 上山湖野
 2. ヤンボシ塚古墳
 3. 梅崎古墳
 4. 城塚古墳
 5. 仮又古墳
 6. 東畑古墳
 7. 古藏古墳等埴石材
 8. 晩免古墳
 9. 潤野古墳
 10. 宇賀高古墳
 11. 桂原古墳
 12. 桂原2号墳
 13. 国越古墳
 14. 鶴亀古墳
 15. 不知火塚原1号墳

第12図 宇土市周辺裝飾古墳位置図 (1/50,000)



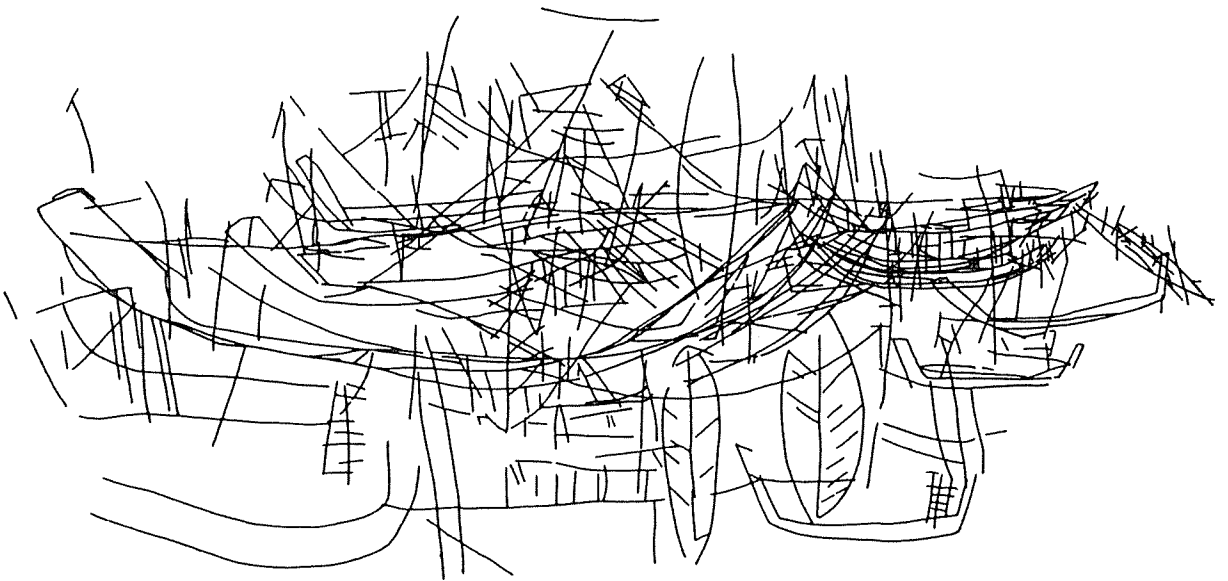
第13図 ヤンボシ塚古墳装飾文実測図（1/4）



第14図 梅崎古墳裝飾文実測図 (1/10)



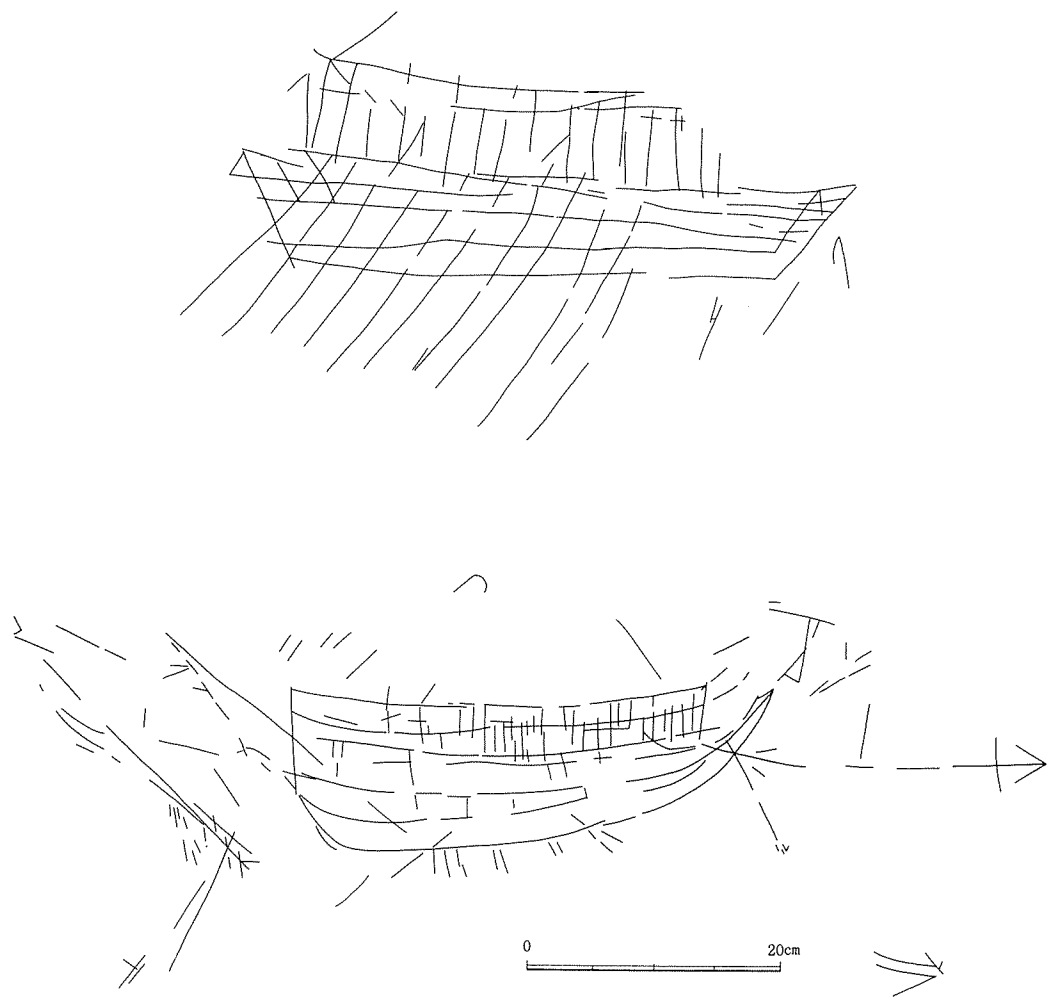
(西側壁)



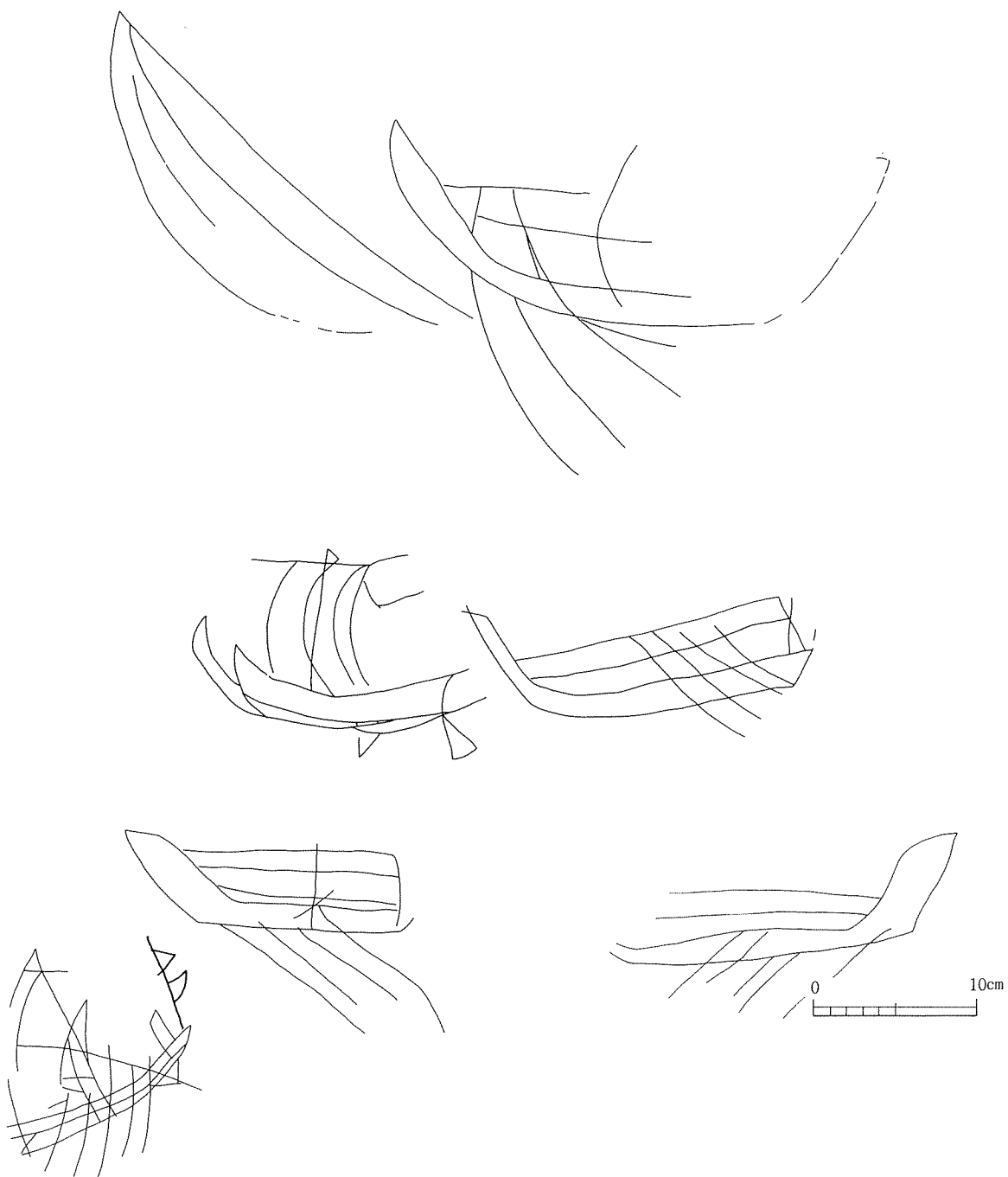
(東側壁)



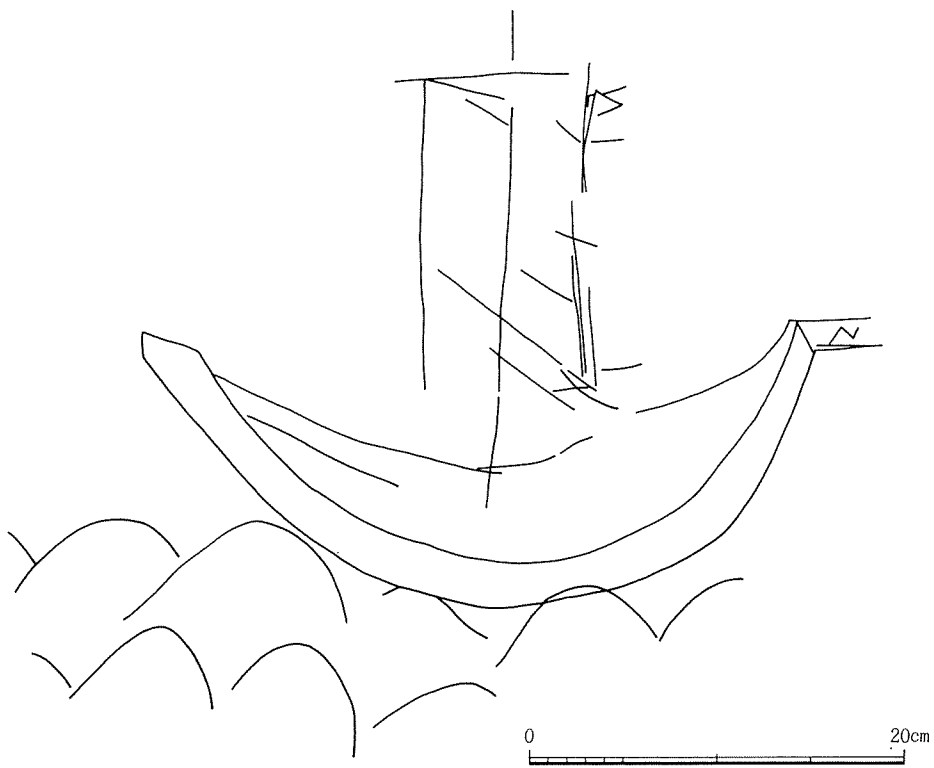
第15図 飯又古墳裝飾文実測図 (1/10)



第16図 古城古墳参考地裝飾文実測図（1/6）



第17図 桂原古墳裝飾文実測図（1/4）



第18図 桂原2号墳裝飾文実測図(1/4)



第19图 不知火塚原1号墳裝飾文実測図（1/4）

第5章 最後に

今回の調査については、前章の小結で述べているので、ここでは上山遺跡の船の線刻の時期について考えてみたい。

宇土半島には、石室に船を線刻で描く古墳が6例知られている。ヤンボシ塚古墳、桂原古墳、塚原1号墳、桂原2号墳、梅崎古墳、仮又古墳がそれである。ヤンボシ塚古墳と、上山遺跡は距離にして350mの位置にあり、近くには石棺の残欠や刀子の発見の話などもあり、地域的に見て、船の線刻の時期を古墳時代と考えたのであるが、その後、類例を調べる中で否定的な要素が増してきた。

渡辺誠氏著の「網代帆・隼人とその周辺」を参考に構造から船の線刻の時期を考えてみたい。まず、上山遺跡の船の帆は追風により帆が膨らんでいる表現である。これは、木綿帆として描かれていると考えられる。また、縦線は北前船や『山海名産図会』の若狭鯨網に描かれている船の帆に見られる。木綿帆の普及は18世紀後半、それ以前はさし帆、さらにそれ以前は、帆の材料には網代や蓆が使われていた。^(註1) また、船首部分の水押の形成は日本では近世。中世では中国でも水押はみられない。^(註2) 上山遺跡の船の船首部分はやや不明瞭だが、水押が描かれていてもおかしくない船首の構造である。

このような点から、上山遺跡の船は近世（18世紀後半）以降の所産と考えられるようになった。今後、専門的見地からの所見を待ちたい。

註

(1) 渡辺 誠「網代帆・隼人とその周辺」『西と東 前嶋信次先生追悼論文集』汲古書院、1985年。

(2) 註1書。

圖 版



図版1 網田平野空中写真



図版 2 田平遺跡遠景



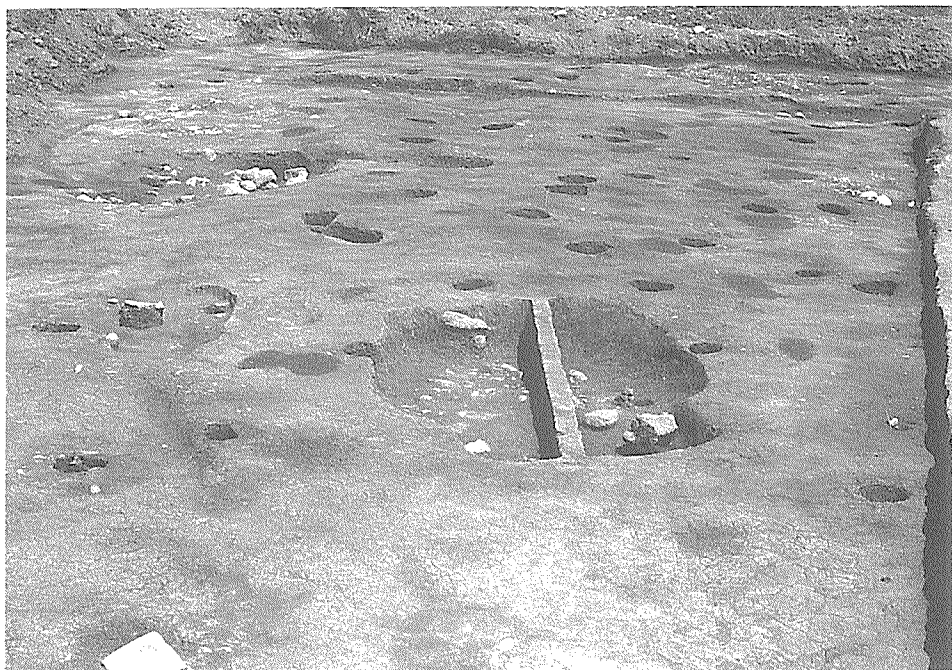
図版 3 第 4 次調査地全景



図版 4 調査地北側



図版 5 調査地南側



图版6 1号土坑周边



图版7 1号土坑



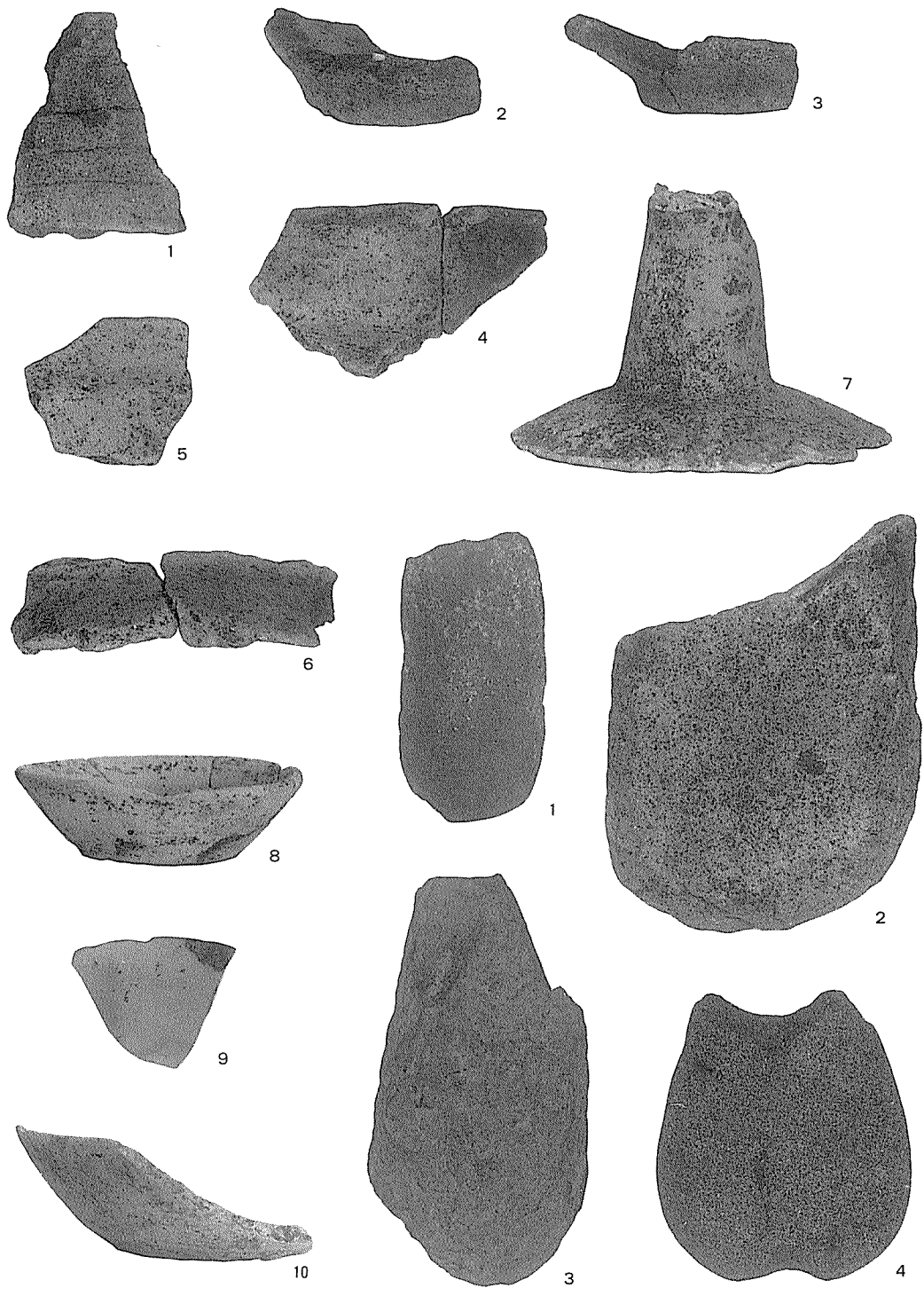
図版8 遺物出土状態（土師器高杯）



図版9 遺物出土状態（土師器皿）



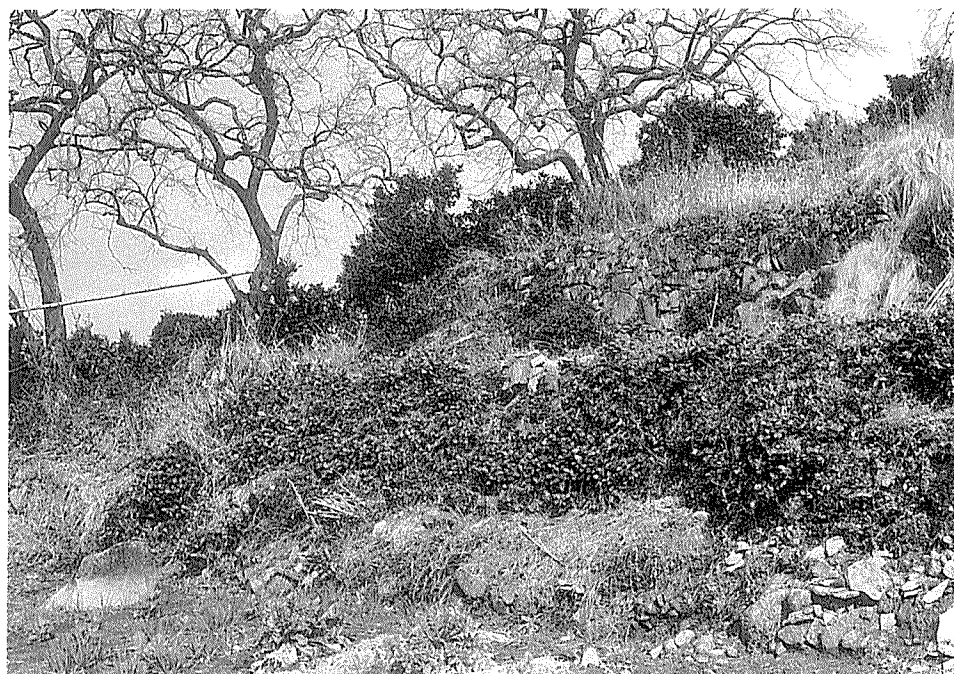
図版10 遺物出土状態（石器）



図版11 出土遺物 (約1/2)



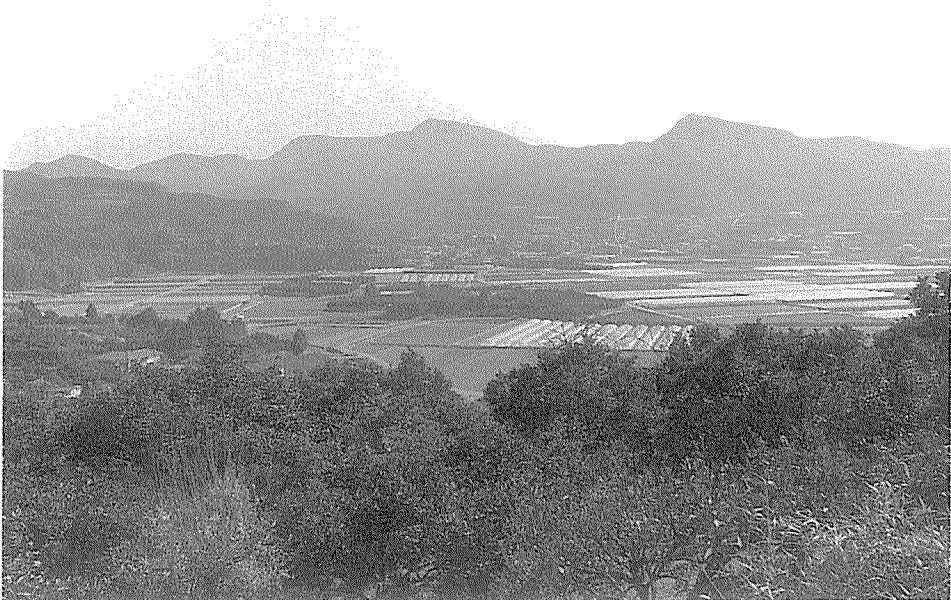
図版12 上山遺跡遠景



図版13 上山遺跡近景



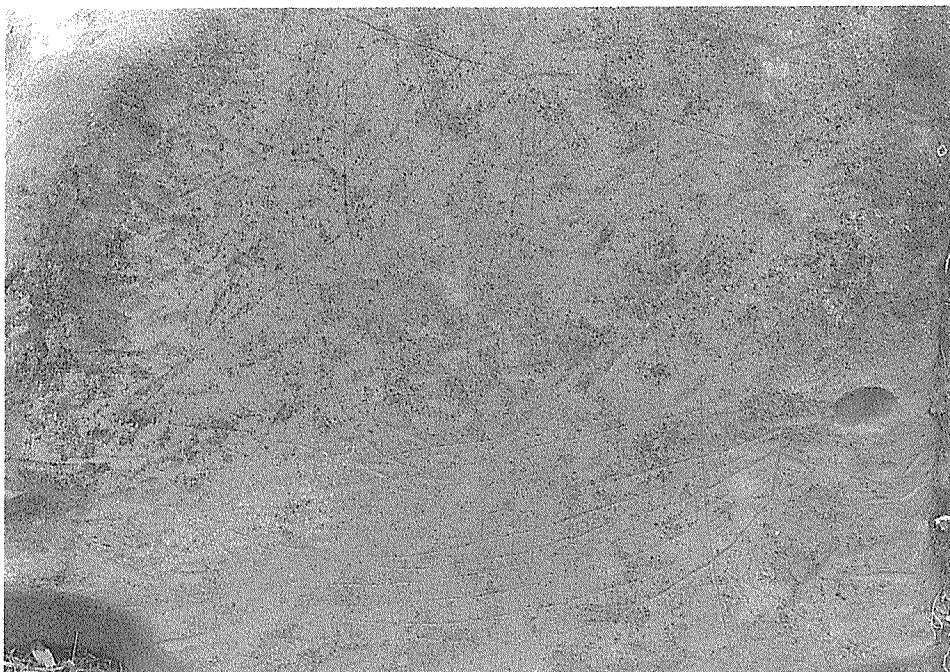
図版14 上山遺跡より北を望む



図版15 上山遺跡より南を望む



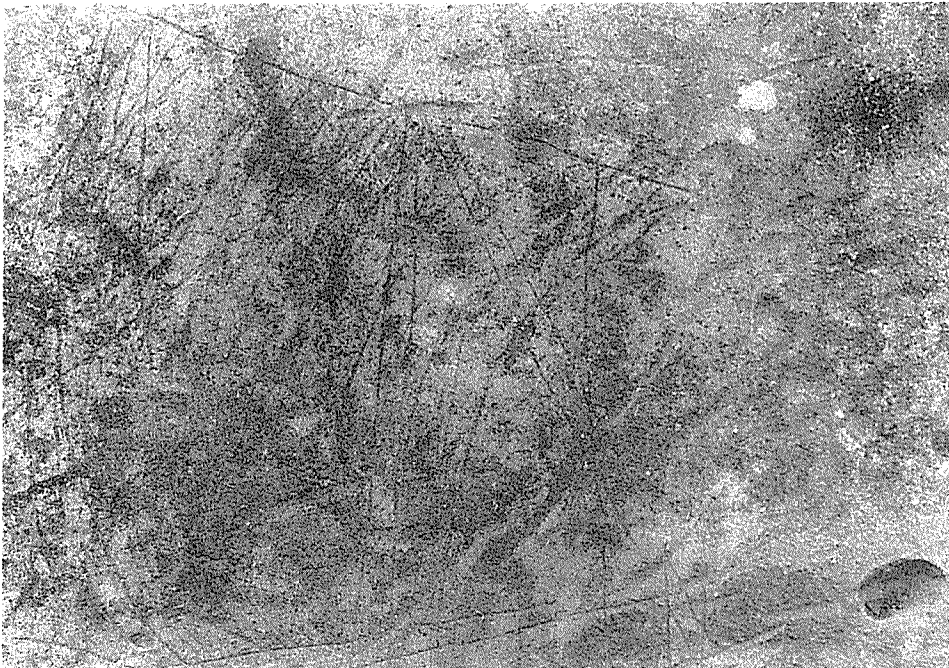
図版16 線刻のある石材



図版17 線刻船（全体）1



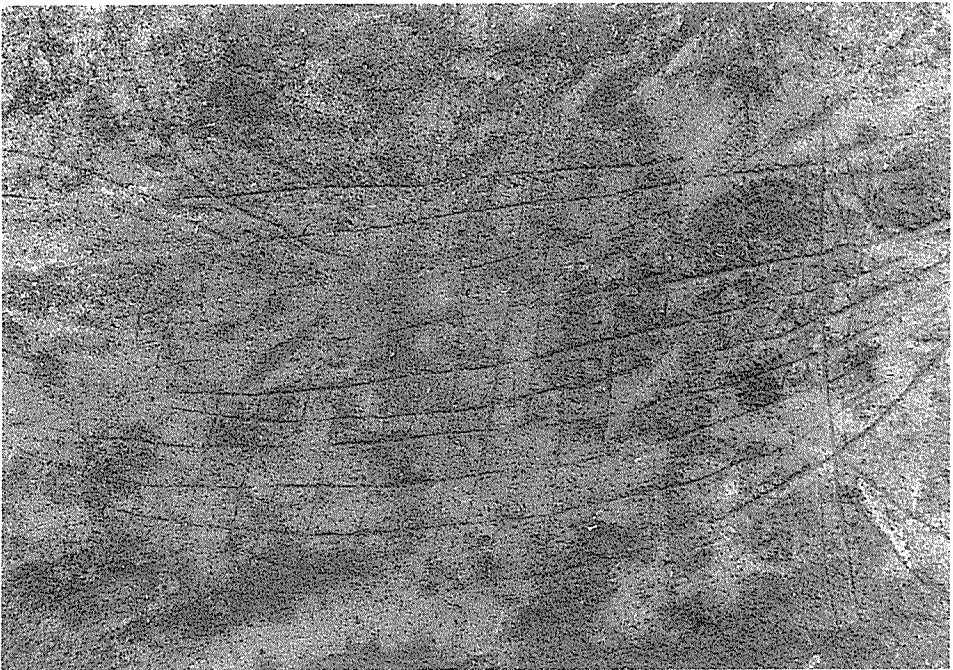
図版18 線刻船（全体）2



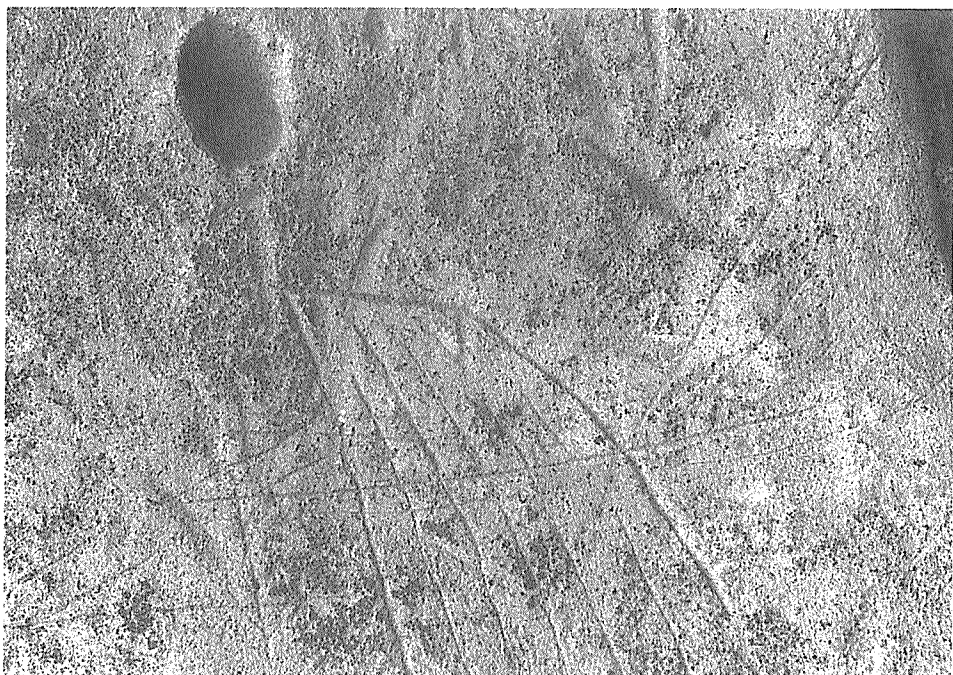
図版19 線刻船（マスト部分）



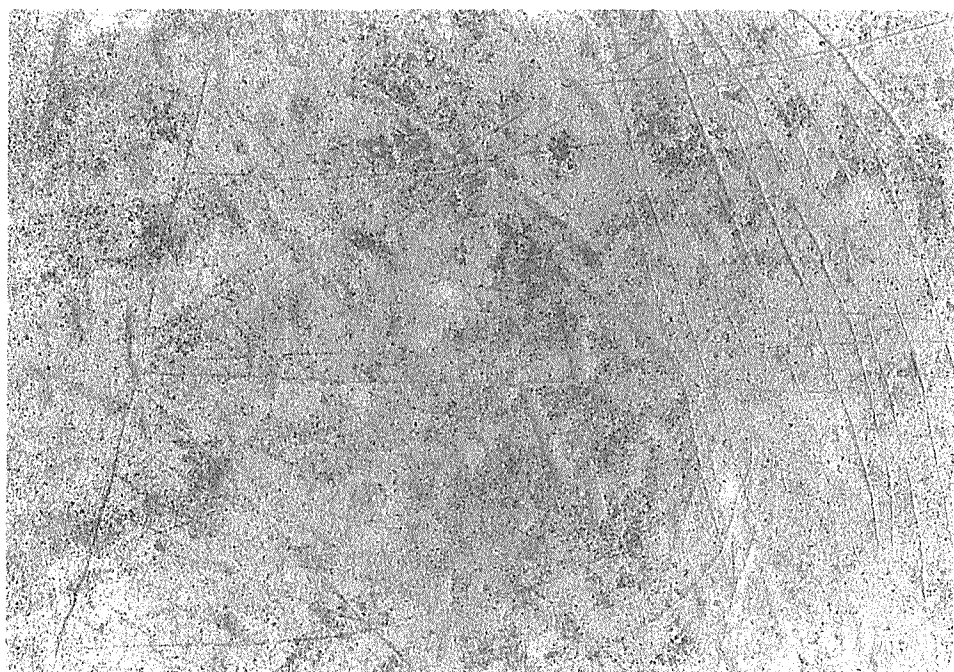
図版20 線刻船（船首部分）



図版21 線刻船（中央部分）



図版22 線刻船 (船尾)



図版23 線刻船 (中央部分)

宇土半島基部遺跡群 II

タピラ カミノヤマ
田平遺跡・上山遺跡

宇土市埋蔵文化財調査報告書第17集

昭和63年 3月31日

発行 熊本県宇土市教育委員会

熊本県宇土市浦田町51番地

印刷 (資) 下田印刷

